

山口恵一郎先生を悼む

山口恵一郎先生は、平成3年10月9日、自宅近くの津田沼中央病院で、骨髄小脳変性症がもとで逝去された。享年69才であった。

本学会では、創立当初から歴史地理学紀要の編集にたずさわり、評議員、常任委員を歴任された。創立後の学会を軌道に乗せる上でも多大の功績があったのは、多くの人々の知るところである。

山口先生は、大正10(1921)年1月18日、愛知県豊橋市で誕生された。旧制豊橋中学校を卒業後、3年ほど北設楽郡の小学校に教員として勤務されたが、勉学の念止み難く上京。当時、私学で新進の教授陣のそろっていた法政大学高等師範部歴史地理学科(現在の法政大学文学部歴史学科・地理学科の前身)を卒業、文部省図書局・教科書局に勤務された。

山口先生がその真価を発揮する契機は、昭和21年5月、内務省地理調査所(現在の建設省国土地理院)に勤務されたことに始まる。昭和48年1月国土地理院を定年退職、その間、地図部の研究係長、技術員養成所(現建設大学校)教官、研究員等を歴任、昭和46年には国土地理院長から勤続精励により表彰を受けられている。35年からは国土地理院の代表として、海上保安庁水路部との間で「地名等の統一に関する連絡協議会」委員、47年南極地名委員会委員を歴任された。国土地理院の定年退職後、財団法人日本地図センターに調査部参事役・地図相談室長として迎えられ、56年に定年。その後、嘱託となられ、59年1月には日本地図センターを退かれ、日本グラフィックマップ(株)の取締役になられる傍ら、研究三昧の生活に入られた。

学会として特に深く関わられたのは、この歴史地理学会であり、また日本国際地図学会であった。また、地名研究協議会では初代の会長としても活躍された。

山口先生が残された業績は多く、代表的なものをあげると、昭和29年3月地理調査所発行「主要自然地域名称図」があり、第二次大戦後占領軍の命令で地理調査所が作製した80万分1土地利用図の説明書にあたる『日本の土地利用』を小笠原義勝氏と共同で著されたのが、最初の単行本であった。論文では「都市図の地理学的理論」(地図2-1)ほかがある。



恩師であり上司であった渡辺光博士が最も信頼していたのが山口先生であり、共編著として世に送られたのが、地誌的記述に優れた朝倉書店刊行の『日本地名事典』で、同書店の『日本地名大事典』『世界地名大事典』も同じコンビであった。さらに『コンサイス地名事典・日本』を谷岡武雄博士とまとめられた。

『地名の成り立ち』(徳間書店)、『地名を考える』(日本放送出版協会)、『地名の論理』(そしえて)には、先生の地名観が良く表わされている。地名に関する著書・共著も多く、『地図と地名』(古今書院)、『地名を歩く』(新人物往来社)、『難読地名事典』(東京堂)などがあり、『日本図誌大系』(朝倉書店)、『地図の風景』(そしえて)、『図解 地図事典』(武揚堂)など、地図に関する著書・編書も多い。

国土地理院・歴史地理学会・日本国際地図学会・地図資料協会などいろいろな所で、学会誌をはじめ雑誌・書籍などのまとめかた・編集のノウハウを、山口先生から教わった人は多い。まさに「手をとって」である。面倒見の良さ、暖かさは、その温厚篤実な人柄から掘ってきたものであろう。

一昨年の秋ごろから歩行や文筆の不自由を嘆かれ、次第に外出をはばかれるようになった。昨年9月入院され、回復を祈っていたのだが、ついに天に召されてしまった。あれもこれも伺っておきたいことがあったのだが、いまはもうそれは果たせない。

心からご冥福を祈るばかりである。

(清水靖夫)